

先月号の鏡について少し付け加えますと、増谷文雄師訳『正法眼藏の古鏡』に「もろもろの仏祖が伝え受け、保持し、またつたえるものは古鏡である。それはいつでも、おなじ面をうつし、おなじ姿をうつし、おなじ証まことをうつしだす。」と、利那利那せつなせつなの変化を正直に映し出す鏡は我々の精進する姿を確認するのにかかすことができないものです。松原泰道師は「私達は鏡を見る」といつているものの、実は鏡からみられているのです。鏡から受身に見られているから、私達は自分の顔の汚れが見え自分に気づき、はじめて自分が見える」のであると言ってみえます。

禅では「明鏡止水」という言葉があります。その意とするところ心の鏡は常に明るく、水は常に止まる事無く流れ、心は常に無心であり、心は常に無色透明がよい。なぜならば、事の判断に狂いを生じさせないがためなり。例えば、心が汚れ黒くなれば腹黒いといわれ信用を失ふることになります。勝手ながら、私は鏡がしゃべり、美点、悪点を指摘してくれ、尚且つ、修正する方法を教えてくださいましたら最高であると思います。又、そんな鏡の役割を担うのが僧侶の仕事の一つではなからうかと思っています。鏡は佛様の法力の一つです。諸難に立ち向かう諸人の相談にのり解決の方法の一端を導いて下さったのがお釈迦様であり、釈迦の説法であったと思います。それが「お経」の佛告・であり、如是我聞・・・になつてお思います。

二朝一夕に人生を歩めたらどんなに仕合せな事でしょう。人間はおおむね心を媒体として行動をしていると思います。潜在意識の問題もありますが、時として無意識の内に行動してしまう事も多々あります。信心も無意識の信心にまで発展しませんとほんとうに身に付いた真の信心とは言えないかもしれません。御存じの如く心という字はそれぞれが四つ重なり合う事無く出来ています。誠に心的作用と同じで掴みどころの無い字です。人間の中心はと考えれば心にその位置を占めております。人間が感情の動物といわれる所以でしょうか。中と心を結べば忠となり、まさに誠を司つていく運びをしていかななくてはいけません。真実甚深、聞是甚深、得聞是經、と先徳諸氏のお言葉や物事の内容を聞き取る耳の力を養うことが必要だと信じております。ある本に興味深い話がありました。それは再建の神様といわれた大山梅雄氏の話に「弁護士が学んだ法律も、検事が学んだ法律も、判事が学んだ法律も全て同じである。ところが、ある罪を犯した被告に対し、検事は死刑を求刑し、判事は無期懲役を判決し、弁護士は無罪を主張する。つまり同じ事象に対して、当人の受け取り方によって全く違ったものになるということだ」というお話。成程一生懸命勉強して司法試験に受かった人達でも意見が分かれてしまうということですね。世の中、同じ五感を持った人間は存在しないと思つた方が良いのかもしれない。とにかく五感を磨き自己の責任に於いて他の人々に迷惑をかけないように生活したいものです。